

『タイガーと呼ばれた子』にみられる被虐待児への「癒し」の教育

ー「リハビリテーション」の教育と「ハビリテーション」の教育ー

小 林 浩 子 幼児教育科

(2006年10月2日受理)

〔要 約〕

本稿では、トリイ・ヘイデンのノンフィクション小説『シーラという子』の続編ともいえる作品『タイガーと呼ばれた子』を取り上げ、被虐待児に対するより良い教育方法を模索する。この作品では、小学校の特殊学級担任時代に教師として教育にかかわった、問題児であり被虐待児シーラと数年後に再会したトリイが、自らの「癒しの教育」がシーラに与えた影響の大きさと、それがトリイのクラスを卒業した後のシーラ自身に必ずしも良い効果を及ぼしてはいなかったことを、そしてさらなるトラウマを与えていたことを、ティーンエイジャーとなったシーラから指摘され、衝撃を受ける。しかしながらトリイは、そのショックを受け止め、シーラとさらに関わりを持ち続けることで、二人が抱えるトラウマを再認識し、そのトラウマを乗り越える新たな「癒しの教育」を見つけ出す。その過程を、トラウマからの「リハビリテーション」と「ハビリテーション」の違いという視点から考察する。

〈はじめに〉

筆者の前稿¹⁾では、6歳で3歳男児を木に縛り火をつけて大やけどを負わせる事件を起こした問題女児シーラが、州立精神病院小児科病棟に空きができるまでという期限付で、トリイが担任する小学校の特殊学級に転入し、そこでトリイが試行錯誤を重ねながら、行動療法と子どもに対する無条件の愛情と情熱で信頼関係を築くという、被虐待児への「癒しの教育」を実践し、ある程度まで成果をあげることができた、という所まで紹介した。

トリイは、シーラと関わっていく中で、シーラのずば抜けたIQの高さを知り、また、幼児期に母親にハイウェイで車から捨てられ、貧困家庭の中で、麻薬とアルコール中毒の父親と暮らす中で植えつけられた劣等感と諸々のトラウマと、他者、特に大人に対する怒りと復讐心に支配されていたシーラを、その呪縛から解放し、他者、特に大人でも信頼できる人間がいること、子どもを愛し保護する大人がいることを教えた。そうすることで、シーラの問題行動は次第に減り、トリイと接する時や特殊学級の生徒達と交流する時だけでなく、普通学級でも他の教師や生徒とうまく交流できるまでに成長したかにみえた。

しかしながら、トリイの「癒しの教育」には決定的な問題点があった。

本稿では、もはや特殊学級の教師ではなくなったトリイと、14歳のティーンエイジャーに成長したシーラが再会し、ふたたび交流することで、その問題点がど

ういうものであったかを認識し合い、その問題に二人が取り組み、克服していく過程を追うことで、貧困家庭で暴力と中毒に犯された親から虐待された子どもに対するより効果的な「癒しの教育」とはどんなものであるかを再考する。

〈第一章〉

この章では、

- ①前稿『シーラという子』における「癒しの教育」のまとめとその結果起こった問題点
- ②小学生時代のシーラにトリイの「癒しの教育」がもたらした影響力と、ティーンエイジャーに成長したシーラがその結果新たに抱え続けることになったトラウマについて

これらを中心にトリイとシーラとの再会の意義を考える。

1. 被虐待児への「癒しの教育」の再定義

被虐待児といっても、その生育過程や家庭環境は様々である。

トリイが6歳半のシーラに実践した「癒しの教育」は、そここのところを熟慮したものではなかった点で、のちのシーラに再びトラウマを残すことになったと思われる。

白人中流階級出身の若き教師トリイが実践した「癒しの教育」は、一言で言えば、白人中流階級への「リハビリテーション」教育であったと考えられる。

(a) 「癒し」の一般的な定義

- ・心のトラウマを取り去り、社会へのリハビリテーションをめざすもの

「リハビリテーション (rehabilitation)」という言葉の定義は、広辞苑²⁾によると以下のように定義されている、

治療段階を終えた疾病や外傷の後遺症を持つ人に対して、医学的・心理学的な指導や機能訓練を施し、機能回復・社会復帰をはかること。更生指導。

英和大辞典³⁾の定義では、

リハビリテーション《傷病者の機能回復訓練・職業訓練及び社会支援活動》；(犯罪者などの) 更生とある。

また、ODE⁴⁾では、動詞の“rehabilitate”で以下のように説明している、

- ・restore (someone) to health or normal life by training and therapy after imprisonment, addiction, or illness
- ・return (something, especially a building or environmental feature) to its former condition.⁵⁾

「過去に受けた心のトラウマからのリハビリテーション」などと使う場合の「リハビリテーション」は、ODEの二番目の定義“return (something, especially a building or environmental feature) to its former condition.”で使われることが多い。

トリイがシーラにかつて実践して、新たなトラウマを作り出す元となった「癒しの教育」すなわちシーラの心身へのリハビリテーション教育は、トリイが無意識のうちに、白人中流階級の視点で行われたために、問題を残したものと思われる。

それは、『タイガーと呼ばれた子』中で、シーラがトリイを攻撃する発言にあらわされている。

「あんたは自分があたしの人生をよくしたと思ってるんでしょ？」シーラは叫んだ。一言しゃべるごとに声が大きくなっていった。「自分がものごとをうまく直したと思ってるんでしょ？ちがうんだよ。あんたのおかげでよけい悪くなったんだよ。それまでより、うんとうんと、何百万倍も悪くなったんだよ！・・・(中略)

「あんたはあたしをはめたんだよ、トリイ。あんたはあたしをあ教室に連れてきて、おもちゃで遊ばせて、たくさん本を読ませて、あたしに百万ドルの値打ちがあるようにさせた。で、それから何をした？トリイはずっといてくれた？一度あたしを手にいれたら、そのあとずっと面倒をみてくれた？・・・

(中略)・・・あんたは自分が行ってしまうのを知っているながら、あたしをはめたんだ・・・(中略)・・・あたしはあのときまで、自分の生活がどんなにひどいものかってことを知らなかったんだよ。そこにあんたがやってきて、突然まったくちがう世界があるってことを教えたんだよ。・・・(中略)

「あんたはすごい力をもっていたよ、トリイ。あたしはものすごくあんたのことを愛していた。ものすごくね。それなのにあんたは何をしてくれた？あたしをドアから押し出して、あたしを置いていってしまったんだよ。・・・(中略)

「それだけじゃないよ。トリイは行ってしまうときに全部を一緒にもっていってしまったんだよー太陽も、月も、星も、全部を。もう一度すべてをもっていってしまうのなら、いったいどんな権利があつてあたしにあんなものをくれたの？⁶⁾

(b) 貧困社会の虐待による心身のトラウマから癒す教育

—「リハビリテーション」—

アメリカには、犯罪者の民間社会復帰施設「アミティ」(ラテン語で友愛・友情を意味する)という団体がある。「アミティ」は、犯罪者が増え続けるアメリカで、再犯を防ぐ最も効果的なプログラムのひとつとして、注目されている団体である。

アリゾナ州ツーソンを拠点とするアミティは、1981年に同州で開始された「治療共同体」である。同じような問題を抱える人々が、一定期間生活を共にしながら、問題を乗り越えるために互いが支えあうスタイルが基本で、スタッフの半数以上が、治療共同体の卒業生という、自助グループ的要素の強い団体である。

アミティの事務局長であり、創始者の一人でもあるナヤ・アービターはこう語る、

「リハビリというのは、元いた場所に戻ることを意味します。売春、麻薬、暴力を行っていた人が、元の場所に戻るということは、再び問題行動を繰り返すことになってしまいます。たとえば自傷に走る人、暴力を振るう人は、自分が生まれ育ったコミュニティで、そういう生き方を学んでしまったわけです。ですから、彼らは、リハビリテーション (Rehabilitation)ではなく、ハビリテーション (Habiritation)、ゼロから学び直すことが必要な人たちです。問題を断ち切り、社会復帰がうまく果たせるかどうかは、ハビリテーションのプロセスを経て、希望を手に入れられるかどうかにかかっていると思います。」⁷⁾

2. 特殊学級教師トリイがシーラに行った「癒し」の教育の失敗

トリイは小学生時代のシーラとの関わりの中で、途中まではこのハビリテーションに成功したが、当時の教育制度改革の弊害によって、ハビリテーション途中でシーラとの関係を断ち切られてしまった。そしてシーラの心に新たなトラウマの焼き直しをすることになった。シーラは幼い自分を車からハイウェイ上に捨てて、弟だけを連れて家出した彼女の母親とトリイとを記憶の上で混同し、二度捨てられたという誤解によるトラウマを持ちながらティーンエイジャーになったのである。

トリイがシーラに施した「リハビリテーション」教育は、無意識的にせよ、中流家庭の非行少女をもとの平均的な生活に復帰させるためのプログラムにのっとった教育であり、黒人やマイノリティ社会よりも荒んでいるプア・ホワイトとよばれる階層—貧困と暴力と麻薬やアルコール中毒が横行し、しかも白人であるというプライド故に、自分たちより「劣っている」黒人やマイノリティ人種社会が経済面・教育面で援助を受けていることに潜在的に怒りを持つ階層出身のシーラの父親や、その影響力を日常的に行使され従属させられていたシーラには、逆効果だったのである。

〈第二章〉

1. トリイと14歳のシーラとの再会が両者に与えた影響と意義

『タイガーと呼ばれた子』では、第一部56ページもの長いページを使って、6歳半から小学校の学期の終わりの7歳になるまでのシーラとのかかわりが書かれている。これは、短い期間であったにもかかわらず、シーラとトリイの出会いと関わりあいが、二人にいかにも大きな影響を及ぼしあったかということを物語ると同時に、その後14歳のティーンエイジャーになったシーラの激変がトリイに与えたショックをより鮮明に読者に伝えている。

当時アメリカで実施されたメインストリーム法によって、特殊学級は閉鎖され、特殊教育を担当していた教師は、普通学級の補助教員という立場にされてしまった。トリイは、自分の納得のいく生き方を求めて、学位取得のため大学院での研究の道を選ぶ。その結果、トリイが教えていた小学校がある州とは1600キロも離れた土地に行くこととなり、進級後のシーラとの接触は物理的にも絶たれてしまう。それに関わらず、トリイはシーラのその後を忘れることができない。気づかないうちに、それほど強い影響を、問題児であったシーラの成長に関わることから教師トリイ自身も受け

ていたのである。それは、教師トリイすなわち著者トリイ・ヘイデンも自身の母親から捨てられ、祖父母のもとで育った経験があったことと関係すると思われる。

トリイ・ヘイデンの母親は、シーラの母親とは違って、トリイを祖父母にあずけた後も連絡を取り合っていた。しかし、トリイの母親は、トリイが生まれたために自分の人生が犠牲になったと考えており、ことあるごとに言葉の暴力で娘トリイを攻撃し続けていたのである。それがトリイの少女時代を孤独なものとした。さらに成長した後も、『シーラという子』を発行し成功をおさめたことも、母親の嫉妬心と恨みのもとにしかならず、誉め言葉や祝福ではなく、娘の成功は母親の犠牲によって得られたものであるという言葉の暴力によって、トリイは傷つけられ、罪悪感を持たされ続けた。そのことが、父親の暴力を受けながらも、被害者であるシーラが加害者の父親をかばい、受けた暴力を否定し、自分は悪い子だから酷いことをされるのだと、自分の存在に罪悪感を持つ姿に重なって、一層シーラとトリイ自身とを同一視した面があるのではないだろうか。トリイの母親も、シーラの父親も、子どもの人生にことあるごとにいわば「毒」を注ぎ続け、子どもが成長した後も「毒」によって植えつけた罪悪感で親の元に縛りつけ、人生を支配する、そういう共通点をもっていた。

医療機関のコンサルタントでありグループ・セラピストのスーザン・フォワードは著書『毒になる親——生苦しむ子供——』で述べる、

「毒になる親」に育てられた子供は、大人になってからどのような問題を抱えることになるのだろうか？子供の時に体罰を加えられていたにせよ、いつも気持ちを踏みにじられ、干渉され、コントロールされてばかりいたにせよ、粗末に扱われていつもひとりぼっちにされていたにせよ、性的な行為をされていたにせよ、残酷な言葉で傷つけられていたにせよ、過保護にされていたにせよ、後ろめたい気持ちにさせられてばかりいたにせよ、いずれもほとんどの場合、その子供は成長してから驚くほど似たような症状を示す。どういう症状かといえば、「一人の人間として存在していることへの自信が傷つけられており、自己破壊的な傾向を示す」ということである。そして、彼らはほとんど全員とっていいくらい、いずれも自分に価値を見出すことが困難で、人から愛される自信がなく、そして何をしても自分は不十分であるように感じているのである。

「毒になる親」の子供がこのように感じるのは、意識的であれ、無意識的であれ、親から迫害を受

けたときに、「自分がいけなかったからなのだろう」と感じるためであることが多い。外部の世界から自分を守るすべがなく、生活のすべてを親に依存している小さな子供は、親が怒っているのは自分がなにか“悪いこと”をしたからなのだろうとを感じるのが普通である。自分を守ってくれるはずの親が実は信頼できない人間だったなどということは、小さな子供には考えもつかないからだ。

そのような子供は、「罪悪感（なんとなく後ろめたい感じ）」や「自分が不十分な感じ」を心の奥に抱えたまま育っているのだから、成長して大人になった時にポジティブで落ちついた自己像を持つことが非常に困難になる。自分に対する基本的な自信がなく、生きていくことの価値がなかなか見いだせないようになるのはそのためなのだ。この心のメカニズムは成長後も継続し、人生のさまざまな局面に影響を及ぼすようになる。⁸⁾

この例のように、14歳に成長したシーラもやはり、幼児期から父親たちから植えつけられた劣等感と、わが身を守るよりどころとする反抗的心や攻撃的な態度を変えられずにいた。飛び級をする学力を持ち、教科で一番ラテン語をおもしろいと言い、トリイが学生時代にさえ読みこせなかった、シーザーのガリア戦記に夢中になるほどの知能を持つにもかかわらず、シーラは自分を肯定的に評価することができずにいる。それは、シーラとトリイの次のエピソードからもわかる。

「トリイが本の中であたしのIQについていつてるのは読んだよ。あれを読んで思ったんだ。あーあ、トリイはこれ、でっちあげたんだ、ってね。あれはあたしじゃないよ」シーラはいった。

「あのとおりなのよ」

「ちがう」

「今までだれもあなたが才能あふれる子だってこといわなかったの？」

シーラは首を横に振った。

ショックを受けて、私は彼女のほうを見た。

「まさか」

「あたし、才能なんてないんだよ、トリイ。自分で分るもん」

「なんでそんなこというの？」

「えー？だってそうなんだもん。つまり、あたしはあたしっていうこと。自分でもわかってるんだ。自分が頭がよくないってことが。あたし、ばかだもん。」

「そんなことないわよ！」（中略）

「じゃあ、なんで自分がばかだと思うか、例をひ

とつ言ってみて」

「えー？たとえば教室でさあ、先生が何かいったときに、他の子はみんな一回でわかるのに、あたしはぜったいにそんなことないもの。あたしは、きいたときはわかったと思うんだけど、でもそのあとでいろいろ疑問がでてくるんだ。こういう場合はどうなるの？とか。こういう場合には正しいかもしれないけど、でも別の場合でも正しいんだろうか、とかね。（中略）あたしがまったく理解できない領域がこんなにもあるのに、あたしのまわりにはすわっている子はみんな一生懸命書いてるんだよ。みんなはわかっているけど、あたしにはわからない。それにもしあたしが質問すると、すぐに先生はこういうんだ『先に進まなくちゃならないんだ。きみのせいで進めないよ』って。これではっきりわかったんだ。あたしは頭が超悪いんだって。だってあたしはほんのちょっとのことしかわからないんだから」（中略）

「あたしがクラスでいちばん年が下だからなんだよ。あたしはみんなほど長いあいだ学校に行っていないんだもの、不公平だよ」非難のこもった重苦しい声で彼女はいった。「だからあたしにみんなと同じだけわかっていろといわれたって無理なんだよ」

「シーラ、あなたがクラスでいちばん年が下だっていうのはね、あなたが他の子たちよりたくさん物をわかっているからなのよ。その反対じゃないわ。他の子たちが質問しないのは、その子たちの頭があなたほど多くの可能性を早く考えつかないからなのよ。その子たちは、そもそも疑問点があることにすら気づいてないのよ」⁹⁾

このような箇所は、本文中いくつか見られるが、いくらトリイがシーラの才能をわからせようとしても、シーラは頑ななまでに何度もそれを否定する。

シーラがトリイの意に反して、自分の能力以下のことを常を選択することは、この小説の最後にもでてくる。

最初の頃よりは自己肯定できるようになったシーラだが、その学力からして当然卒業後は大学に進学するだろうというトリイの期待に反して、シーラはマクドナルドに就職するとトリイに告げるのである。

2. トリイのシーラへの「癒し教育」再挑戦

(a) 「ハビリテーション」

第一章で言及したアメリカの民間社会復帰施設「アミティ」は、「治療共同体」という考え方をベースにしているが、これはもともと、精神疾患や、薬

物依存などの問題を抱える人々の「治療」として1950年代にアメリカで始まり、後にベトナム戦争の帰還兵や犯罪者にも適用されるようになった。アミティの施設では、プログラムに参加している人のことをレジデント（居住者）と呼び、互いをファミリーと呼び合う。ナヤ・アービターはこう述べる、

「レジデントのほとんどが、希望を失って当然と思えるような過酷な体験をしている人です。失った希望を取り戻すためには、まず、失うに至った過程を見つめる必要があります。それは辛くしんどいプロセスですが、そのプロセスを経ずに問題を乗り越えることは難しいと思います」¹⁰⁾

創始者の一人であるベティ・フレイズマンも、10代前半で鬱状態となり、薬物中毒と自殺未遂を繰り返した。家出し友人の家を転々としていた彼女が再び希望を取り戻したのは、似たような体験をし、問題をある程度乗り越えてきた、「少し先行く人々」と出会ったことがきっかけだったという。

なぜそんなに生き苦しいのか、という問題のルールを見つめることを、彼らから、実体験として教わったという。

『タイガーと呼ばれた子』の14歳になったシーラも、トリイが当時勤めていた小児精神科クリニックのサマーキャンプに助手として参加を誘われ、そこで知り合った似たような境遇の男児—異国で親に捨てられ、さらにまた里親にも捨てられそうになっている—その子を助けようとする行動を通して、ベティ・フレイズマンのいう「少し先行く人」の役割をすることで、自らのトラウマを再現し、そこからサバイルする；親に捨てられ、親代わりとして愛情と信頼を寄せていた教師トリイにも捨てられた幼児の自分を、成長した自分が助けるという疑似体験を経て、自分で自分を救うプロセスを偶然にも実行することとなる。

(b) トリイによるシーラへの「ハビリテーション」

特殊学級が国の方針で閉鎖され、補助教員の立場にすることに満足できなかったトリイは、自分の専門である「選択的無言症」の研究を進めるため大学院の博士課程に進学し、ある大きな都市の小さな私立の精神科クリニック「サンドリー・クリニック」に研究心理学者として勤務する。

そこは、シーラが最後に住んでいて、消息をたったブロードビューという町の衛星都市で、ひょっとしたらシーラの行方を探せるかもしれないという希望も手伝っての就職だった。

スタッフは、所長を含む5人はベテランの児童精神科医。もう一人はすでに児童心理学の博士号を持

つ若くて才気煥発な心理学研修者ジェフで、トリイにとっては理想的な職場に思われた。

そこでトリイは、予想通り、シーラの居所を探ることができ、再会を果たす。14歳を迎えようとするシーラは、かつてトリイが知っていた幼いシーラとは別人のようなティーンエイジャーで独特のパンクファッションに身を包み、よそよそしげで、かつてのトリイのクラスのこともまるで覚えてないと言い、トリイはショックを受ける。しかし、かつてのシーラの面影が忘れられないトリイは、失った時を取り戻そうと努力する。シーラも口では、トリイを忘れたと言いながらも、やはりトリイとの関係を取り戻したいと願っており、トリイとの交流を再会する。

トリイとシーラのトラウマが再発見され、シーラが「ハビリテーション」の体験を通して自己肯定をする機会を得て、代理母的存在のトリイと、かつての誤解をとくべく対決するまでに成長するきっかけとなったのは、このサンドリー・クリニックでトリイとジェフが企画した障害児たちと一日交流することで専門職の大人たちと50分のセラピーをするのとは違った、治療者対患者の枠を越えて、お互い同士がより親密な交流の場を持ち、理解しあい、助け合うという、以前触れたアミティの「治療共同体」の理想に沿った（トリイたちがこの共同体のプログラムの有効性を知っていたか本文には触れられていないが）サマー・プログラムというものの計画・実施にあたって、シーラを誘ったことだった。

スタッフ不足を補うためにトリイが思いついたのが、以前自分の特殊学級で大人ばかりではなく中学生もスタッフとして入れることで効果的な作用があったことだった。

中学生。中学生！

そうだ、シーラだ！

理想的な解決策だと思えた。責任感を持てるほどには大人であるが、まだ柔軟性と協調性を示せる若さもある。

シーラはこのような状況にはぴったりの年齢だった。いっぽう私のほうとしては、彼女に理解を示す大人たちがいる、きちんとした、刺激のある環境のなかで夏を過ごすチャンス彼女にあたえることができる。とりわけ、こうすれば私たち二人が自然なやり方で一緒に時を過ごせるようになる。私はもう一度シーラのことをよく知りたいと思っていた。あのひよろひよろした思春期の女の子のなかのどこかに、私があればほどまでに愛した子供がいるはずだった。その子を探し出すチャンスがほしかった。¹¹⁾

シーラは喜んでこの申し出を受け、こうして元来は精神科で治療効果のあるプログラムとして始まった「ハビリテーション」を、シーラも体験することとなる。

このサマープログラムでシーラは、自分と近い、しかも似たような虐待や障害を持つ子どもたちとの交流を通して、もう一度かつての見捨てられた幼児の自分と対面し、当時の自分が求めていた理解と助けを、大きくなった自分がその子たちにしてやることで、幼児期を生きなおすのである。その象徴的な事件となったのが、アレホという男児救出事件であった。

南米コロンビアでゴミ箱に捨てられていたアレホは、孤児院にいたところを白人中流階級の知的職業につく夫妻に養子にもらわれ、北米のこの町で恵まれた環境を与えられる。突如として攻撃的な態度をとり、言葉をしゃべらないアレホは、サマー・プログラム参加当初にパニックを起こし、高い木に駆け登って降りられなくなる。これをシーラが木に登ってスペイン語で語りかけ、無事降ろすことに成功して以来、シーラとアレホには、特に深い信頼関係が生まれる。毎日プログラムの教室にくると棚や机の奥に隠れて出てこないアレホに根気強く語りかけ、他の子の助手をする合間にも働きかけを続けることによって、アレホの他人への警戒心をとくことに成功したシーラは、生まれつきかあるいは幼児期の南米での過酷な虐待のせいで、脳に治療不可能な障害があることがわかり、白人の里親がアレホを南米に送り返そうとしている事実を偶然知る。アレホを救って欲しいと懇願するトリイの返事ははかばかしくないので腹を立て、シーラはアレホを教室から連れ去るという強行手段をとる。警察沙汰になることで、トリイたちは危機に瀕するが、所長の適切な対処で里親もアレホへの愛情を再認識し引き続き手元で育てる決心をする。シーラがアレホ救出作戦によって無意識的な自己救出を図ったこと、結局は二人で行き場を失い、最もシーラが信頼できる大人トリイのもとへアレホを連れて帰ったこと、トリイやジェフ、所長、そしてアレホの里親が、シーラの努力によってアレホを送り返さず、シーラを訴えないと決めたことで、シーラは、信頼できる大人もいることを認識するのである。

サマー・プログラムの最中にシーラの誕生日があり、シーラは生まれて初めて自分の誕生日を皆に祝ってもらうパーティをしてもらう。これはシーラにとって、意識的にはないが自分が生まれたことをはじめて他者に祝福してもらうという重要なイベ

ントであった。しかも、そこで有能で若くてシーラとは口喧嘩ばかりしていたジェフに、シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』の本を贈られることで、シーラは彼女の知性を認められ、大人として扱われる体験をするのである。

これらの体験を経て、シーラは疑似母トリイに、今まで持っていたが、確かめることを恐れていた記憶、車から彼女だけを捨てたという混同された記憶の再確認をし、トリイと感情の吐露をしあう大喧嘩することを通しての対決を経て、それが実の母親がかつてシーラにしたことであって、当時幼い近所の男児を木に縛って焼いた事件も、母親が弟だけをカリフォルニアに連れて行き、自分は悲惨な環境の下に、父親と置き去りにされた恨みから起こしたことを告白する。さらに、トリイと過ごした小学校での昼の生活の間も、夜は父親に暗い部屋に一人置き去りにされていたことや、父親のヘロイン代を支払うために幼児売春を強制され続けていたことを告白する。

過去と現在の生活と内面のトラウマの告白をし合うことで、シーラとトリイは、新しい人生を共に歩き出す勇気を得るのである。

この体験から勇気を得て、さらに未解決の最大問題である本当の母親と弟探しを実行するために、シーラは、トリイに内緒で新聞広告をだし、カリフォルニアへ単身行くのであるが、そこで実の母親に会うのは絶望的であることを悟ったシーラは、力尽きて、再びトリイに助けを求め、トリイは救出に行くのである。

この出来事で、実の母を見つけるすべは無いという事実をシーラは受け入れる。そして、第二の母として支え続けてくれるトリイを「お母さん」と呼び、理想化した教師としてではなく、生身の人間で年上の母代わりの大人としてトリイを受け入れる。そして、17歳に成長したシーラはトリイに、トリイの期待した大学進学ではなく、自立してお金を得る仕事につくこと「マクドナルドへ就職する」ことを宣言、「ハビリテーション」を経て独力で将来への希望を見出す道を自ら選んだことをトリイに伝える、

「さあ、お母さん、もうそろそろ私を大人にさせてよ。大学はあとでも行けるよ。たぶんね。先のことなんかわからない。

でも今はハンバーガーなの」(中略)

「昔みたいにいってよ。“シーラ、あなたがやりたいと思うこと、何をやってもいいのよ。私が必要になったら私はここにいるわ。あなたのすぐ後ろにいるから” って。あたしにそう

いってよ」(中略)

「わかったわ。あなたが正しいと思うことを
やりなさい。あなたを信頼しているから」

「ありがとう、お母さん」¹²⁾

〈おわりに〉

本稿では、前回『シーラという子』で特殊学級を担当したトリイが、問題児シーラをトリイの「癒しの教育」によって一般社会に「リハビリテーション」させる試みの半ばで、当時の教育制度やシーラの父親の夜逃げによる行方不明等で、関係を絶たれざるを得なかったトリイとシーラが、トリイの努力によって再会し、今回は前回の失敗のもととなったトリイの無意識の白人中流階級への「リハビリテーション」ではなく、貧困家庭や犯罪者の家庭、マイノリティ社会に効果的なプログラムである「ハビリテーション」の試みを用いて成功する過程を『タイガーと呼ばれた子』の小説のエピソードを取り上げて考察した。

この「ハビリテーション」の視点の優れていたところは、前回の「リハビリテーション」と違い、白人中流階級出身の教師トリイ自身も、シーラの属する貧困と暴力が日常的にあるプア・ホワイトの生活を知り、対等な人間の視点に立って、お互いの存在を認め合えたことだろう。そして、クラスやプログラムが終了したあとも自立した人間同士として、引き続き交流を持てるのだという希望を二人が見出したところにあると

いえるだろう。

〈引用文献〉

- 1) トリイ・ヘイデン著 入江真佐子訳 『シーラという子』 早川書房 1996
- 2) “e dictionary” SHARP PW-8900 『広辞苑 第五版』 岩波書店
- 3) 前出 “e dictionary” 『新編 英和活用大辞典』 研究社
- 4) 前出 “e dictionary” “OXFORD Dictionary of English” 第2版 OXFORD UNIVERSITY PRESS.
- 5) 前出 “e dictionary” “OXFORD Dictionary of English” 第2版 OXFORD UNIVERSITY PRESS.
- 6) トリイ・ヘイデン著 入江真佐子訳 『タイガーと呼ばれた子』 早川書房 1996 pp. 196-204
- 7) 野宿者・人権資料センター 『季刊 Shelter-less No.6』 現代企画室 2000 pp. 93-94
- 8) スーザン・フォワード著 玉置悟訳 『毒になる親 一生苦しむ子供』 2006 pp. 11-12 同上 p. 56
- 9) 前出 『タイガーと呼ばれた子』 pp. 173-175
- 10) 野宿者・人権資料センター 『季刊 Shelter-less No.6』 現代企画室 2000 pp. 93-94
- 11) 前出 『タイガーと呼ばれた子』 pp. 104-105
- 12) 前出 『タイガーと呼ばれた子』 pp. 384-385

SUMMARY

Hiroko KOBAYASHI:

The Process of Healing Education for Survivors from Child Abuse in Torey Hayden's The Tiger's Child
—From the Education of Rehabilitation to the Education of Hbilitation—

The Tiger's Child is a sequel to One Child which is a non-fiction story in which Torey, a teacher for handicapped children taught Sheila, an elective mutism child how to heal and survive from her trauma of child abuse.

In The Tiger's Child, Torey met Sheila grown up a delinquent teen-ager and was shocked her healing education of rehabilitation to Sheila caused new trauma.

This paper analyzes the process of Torey's healing education changed from rehabilitation to habilitation.

(Uyo Gakuen College)